



同好会設立と最近の山スキー事情

野澤誠司

若い人たちが山に返りつつある現状は、折りにふれて会報『山』でも報告してきました。4月号でも、雪山にもどってきた若者たちの姿をレポートしています。今月は野澤理事に、スキー同好会創立の経緯と最近の若い人たちの山スキー事情を綴つてもらいました。

最近、はやりの山スキー

今年のGWは天候に恵まれ、会員各位も春山登山に満足されたと思います。北アルプスも例年より残雪が多く、山スキーは当たり年だつたと思います。

最近、山での滑りのツールとしては、若者を中心にスノーボード、テレマーク3割、アルペン3割ぐらいの比率になっています。

アルペンは、昔から「登りのツー

つてきているのも事実です。夏であれば「山を歩く」、雪の上であれば「山を登って滑る」というきわめて単純な行動もあります。

話は少しそれますが、最近の若者の間では「農業」も注目されています。しかし、この場合の農業という言葉には注意が必要です。彼らは従来の「農業」を踏襲した

いのではなく、言うなれば「農的な暮らし」を取り入れたライフ・スタイルに興味があるということです。そこでもファッショナブルに農業（農的な暮らし）を捉え、楽しみとして自然体で生活に取り入れています。山に話を戻しても、同じような傾向に気づくでしょう。つまり、従来からの山岳部に代表される「登山」をしたいのではなく、「山に足を運ぶ」その楽しさを

享受しているのです。

あくまでも「山歩き」を楽しみ、冬であれば「山滑り」を楽しむ。当然、先程と同じくファッショナブルな姿がそこにはあります。とはいっても、根本にあるのは実はファッションよりもテクノロジーに完全に包囲されてしまった生活、その対極が自然、「だから足を運ぶ」ということのようです。

多少難しく言えば、山に包み込まれることで再発見される自分の姿）、それによって「自己の再生」を図っているともいえます。しかしこれは、昔から山に足を運ぶ者達にとつては言葉に出さないだけの「暗黙の了解事項」だったようにも感じます。

さて、そんな彼らの行動には山ガードの存在も無視できません。

■1

2010年(平成22年)
5月号(No.780)
社団法人日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価1部 150円
URL●<http://www.jac.or.jp>
e-mail●jac-room@jac.or.jp

目 次

同好会設立と最近の山スキー事情	1
「山の日」制定運動	
パンフレット10万枚を配付	4
埼玉支部、30番目の支部として発足	6
織内信彦さんの“魂の本”『伊犁紀行』	
日本山岳会図書室へ	7
活動報告	8
資料映像委員会／海外委員会	
東西南北	10
女性の冬季富士山	
——初登頂の通説と行方	
公募登山について	
私の登山感	
追悼 大森薰雄さん	13
図書紹介	14
会務報告	16
ルーム日誌	17
会員異動	17
新入会員	18
図書受入報告	18
INFORMATION	19

▶日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木 10~20時
水・金 13~20時
第2、第4土曜日 閉室
第1、第3、第5土曜日 10~18時

行動している場所は紛れもなく「冬山」であつて、さらにパウダースノーを求めているのであれば、そこは言うまでもなく「雪崩危険地帯」そのものなのです。自然体で軽快に向かつたはずの場所、ところが、そんな彼らの足元は極めて危険な場所なのです。

同好会の設立へ

バックカントリークラブ（以下BCC）設立の経緯は、5年前に公益事業活動のスタート時点に遡ります。

当時、指導委員会は会員に向けて雪崩講習会を企画していましたが、会員の意識が低く、アルパインスキークラブ（以下ASC）以外有効な活動ができませんでした。そこへ公益事業活動を会全体でやらなければならなくなり、吉永英明理事（当時）から黒川恵委員長へ「外部に対しても何を講習会のようものはできないか」という打診がありました。その当時、スキーショップを経営している私の友人の田畠会員に相談して、お客様に講習会を実施する運びになりました。

この10年間の山スキー事情とし

ては、温暖化の影響で山スキーのツアーコースが滑りにくくなつたこと。過去の山スキーイヤーの高齢化でツアーリングに行く人が減つたこと。長びく不況と遊びの多様化に伴つてゲレンデスキー人口が減つて、スキー場もスキーメーカーも苦境に立たされていました。

そこでスキー業界としては、ゲレンデ外でパウダースノーを滑ると楽しいぞと、無責任にコマーシャルして「自己責任」の名の下にバックカントリーケーブルを売り出したのです。また、メーカーはゲレンデが滑りやすいカービングスキーから深雪・悪雪が滑りやすいファットスキーなどへ開発を切り替えました。つまり、これらの流れのなかで冬山へ行こうと行動を始めた若者は、最初は山ではなくゲレンデから始めたのです。

しかし、冬山は危険な所であり、特に山スキーが雪崩事故と密接に関係しているのは昔も今も変わりません。伝統的な山岳部や山岳会は一定の戒めを持って指導を続けてきました。そのような流れが変わってきたのは、90年代後半、ビーコンの登場とそれを使ったレスキューにより、場合によつては雪

崩埋没者を生還させることができるようになつたからです。当時はまだまだ外国の受け売りで試行錯誤していましたが、NPO雪崩ネットワークなどの協力もあり、次第に当会も指導能力を高めてきました。

そんな経緯もあり、われわれ当事者としては、こうした講習会を実施することが公益事業活動に合致すると考え、さつそく大学山岳部出身の山岳ガイドである棚橋靖君、稻葉英樹君にお願いして、ASC協力のもと、上越の関温泉・グリーンビラ（旧笛川旅館）で実施の運びになりました。昔から豪雪の地ですが、現在では「パウダースキーを滑るなら関」というくらい若者の間に定着していたことには驚きました。参加者のほとんどが39歳以下で、その反応は「普通は講習会を受けると上達してさらに上の目標を目指すようになるが、この講習会は冬山の危険を実感でき、より慎重に滑るようになつた」というものでした。体力もやる気もあり、装備も滑走技術も優秀ですが、冬山のなんたるかを知らない若者がいつの間にか巷に溢れてい

過去に4回実施し、われわれが目標にしてきたのは「MAKE THE LEADER」という合言葉で、決して「私を冬山に連れてつて」という安易な気持ちで行ってくれるなという事でした。

アルパインスキークラブとの関係

ASCがあるのになんてBCCなんだという問い合わせがあります。私もASCに所属していたので忸怩たるものがあります。運営に当たって優れた人はいるのですが、リーダーをやれる人は全体の1~2割、自分で自分のことのできる人は1~2割、あとは「私を山へ連れてつて」とぶら下がっている人。しかも、会員の平均年齢が67歳では、若者は入会したくても引いてしまいます。また、ASCには若者を教育するシステムはありません。山スキーができることが暗黙の入会条件といつてよいでしょう。誤解がないように言いますが、ASCが悪いのではなく、ASCは山スキーを楽しむための同好の仲間の会であり、教育・育成することが目的ではないのです。

BCCは、講習をベースとして若い人達のJACへの入会促進を



若者も雪山に登場 山スキーを楽しむようになった

図る目的で形成されているのであります。ASCと張り合うものではありません。後述しますが、ASCの人でも若者の模範となるようなら人であれば、ぜひBCCへ来てお手伝いいただきたい。BCCは同好会というより「教室」と呼ぶべきものです。

JACと若者向けに変化した指向

昔大学山岳部がリーダーの供給源だったころは優秀な会員が多くたのですが、大学山岳部の衰退と若者を積極的に入会させなかつたため会員の高齢化が進み、自前でリーダー養成する機能がないために今日の苦境を招いたと言う

べきです。JACは「サロン」でよいという話は昔から聞きますが、それは「座して死を待つべし」と言つてのことです。現在、現役でやつてある人には到底受け入れられない話です。未来はわれわれ若者の手の中にあるのです。

JAC-YOUTHの話が始ま

った時に、われわれは39歳以下でろう者3名を含む約70人の講習修了生をすでに育成していました。

最初の目的はJACに入会を促す事ではありませんから、全員が会員になってくれるとは考えてはいません。しかし、自前でリーダーを作つていく会でなければ、今後も同じような事を繰り返すでしょう。

今の風潮としては、山は3Kではなく、ファッショントレーニングで「オシャレ」で「カッコイイ」という傾向にあります。『山と溪谷』や『岳人』を読んでいる若者は少数です。読んでいる雑誌は、男子は『ピークス』、女子なら『ランドネ』が先端で、高尾山ヘスカートを履いてくるのはランドネーゼと呼ばれています。これらはファッショントロピカル要素はもちろんですが、服装の内容は機能的です。

識者の間では一過性の流行だと考へる人もいます。しかし、トレランと呼ばれる山を走るスポーツを見ても確実に定着しつつあります。フリークライミングは30年前、邪道のように見られていましたが、今では本格的な登山の導入・入門部分として無視できないポジションとして定着しつつあります。この手のなかにあるのです。

JAC-YOUTHの話が始まつた時に、われわれは39歳以下でろう者3名を含む約70人の講習修了生をすでに育成していました。最初の目的はJACに入会を促す事ではありませんから、全員が会員になってくれるとは考えてはいません。しかし、自前でリーダーを作つていく会でなければ、今後も同じような事を繰り返すでしょう。

今の風潮としては、山は3Kではなく、ファッショントレーニングで「オシャレ」で「カッコイイ」という傾向にあります。『山と溪谷』や『岳人』を読んでいる若者は少数です。読んでいる雑誌は、男子は『ピークス』、女子なら『ランドネ』が先端で、高尾山ヘスカートを履いてくるのはランドネーゼと呼ばれています。これらはファッショントロピカル要素はもちろんですが、服装の内容は機能的です。

識者の間では一過性の流行だと考へる人もいます。しかし、トレランと呼ばれる山を走るスポーツを見ても確実に定着しつつあります。フリークライミングは30年前、邪道のように見られていましたが、今では本格的な登山の導入・入門部分として無視できないポジションとして定着しつつあります。この手のなかにあるのです。

今後の展開について

前回の総会で露呈されました。当会は財政的にも人的にも危機的状況あります。

実力とは、自分の前にチャンスが転がってきた時に確実につかみ取れる能力と言られています。残念ながら今のJACは「眠れる獅子」状態で臨戦態勢にはありません。時代の変わり目に来ている今、広報、ネット環境、教育、財政、企画、経営など一芸に秀でている人材は多いと思います。これらで棚卸しをして、年齢にかかわらず在野の賢人を積極的に登用して事

に当たらねばなりません。

地方支部の活性化ともリンクする話で、従来縦割りだつた組織のなかに、例えばスキーを横軸とした若者の繋がりが中央・地方で横断的に構築され、地方の若手リーダーを養成する取り組みもできます。指導する側は大変ですが、若者が「自分が年寄りになつたらあなりたい」と思える人をいかに集められるかがカギです。山中でも「ああはなりたくない」爺さん婆さんが多い昨今、本会には東海支部、関西支部をはじめ、まだ希望があると思います。

バックカントリークラブ創立は端緒ですが、今までの登山の核心の部分は残し、トレランやテレマーク、ボーダーやフリークライミングやランドネーゼも周辺において、裾野を広げる方向を摸索すればよいでしょう。

今までの山岳会とは一線を画して、若者主体の「第二日本山岳会」を作ればよいではないかという意見もありますが、そんなケチなことは言わずに、今までの旧弊は捨て、よいところは残し、新しい点を加えた「日本山岳会」を作ればよい

プロジェクト

「山の日」制定運動で パンフレット10万枚を配布

萩原浩司

日本山岳会をはじめとする山岳5団体は、「山の日」の制定を目指し、力を合わせて全国的な啓発運動を展開することになった。4月9日、「山の日」制定協議会を結成し、同26日、5団体がそろって体協記者クラブで会見して運動のスタートを発表した。

日本山岳会は日本山岳協会、日本勤労者山岳連盟、日本山岳会、日本山岳ガイド協会、HAT-J（日本ヒマラヤン・アドベンチャーラスト）で、国民祝日としての「山の日」は《日本人の生活と文化に結びついた山の恵みに感謝するとともに、うつくしく豊かな自然を守り、育て、次の世代に引き継ぐことを国民のすべてが銘記する日です》とした。

具体的な運動の進め方について

山岳5団体は、それぞれの組織や団体の特性を生かして活動を展開するとともに、連携を密にして、5団体が「山の日」制定を視野に

入れた企画、イベント、広報活動などに取り組み、国民運動に盛り上げていくことを申し合わせた。

共同のアピールにはより多くの人が山と親しみ、山を楽しんでほしいとの願いを込め、「この運動を通じてすべての登山者の安全と健康に寄与したい」「山を愛する私たちの運動の趣旨に賛同され、より多くの方々、省庁、自治体、団体、企業、学校、研究者、さらにメデイアの各位より、ご理解とご支援を得たい」と訴えた。

5団体による具体的な広報活動の第一歩として、『山を考える／山の日をつくろう』というパンフレットを作った。そこには「山の日」制定に向けた声明文とともに、クイズ感覚で山への関心を誘う「Q & A」のページを設けた。

このパンフレットは10万部のうち日本山岳会が5万部の配布を引き受け、4月末から連休明けにかけ、全国の30支部に300部から

1000部を送り届けた。支部のイベントでの配布だけでなく、地元の山岳会、自治体、観光協会などの関係団体、「山の日」に関心を持たれている協力者、教育機関、学校、山小屋などに効果的に配布してほしい。家庭や学校、職場などで話題になれば、それだけ山への関心が高まろう。

また、日本山岳会のウェブサイトに4月26日から「山の日」のページを作り、まずは「山の日」ア

ピールの全文とリーフレットのPDF（電子画像）を掲載した。今後もプラスになる情報や解説で内容を充実させ、「山の日」への理解とPRに役立てたい。また、なるべく早い時期に、5団体協議会としてのインターネットによる広報活動、情報提供を行ないたい。

さて、「山の日」を何月何日とするのか。5団体の協議会では、いまの段階で候補の日には特定していない。すでに全国各地にそれぞれの「山の日」があり、これらの地域、団体とも連携をとりながら、当面、国民運動として「山の日」づくりの機運を高めることに集中したい。多くの賛同が得られ次段階に進んだところで特定の



「山の日」制定に向けた活動のパンフレット

パンフレット作成の舞台裏 ——日本に山はいくつある?

「山の日」制定プロジェクトが最初に目指したのは、広く国民に対して活動を認知してもらうということ。そのための広報手段として、パンフレットを作つて理解を求めるところだ。そのための広報手段としては、パンフレットを作つて理解を求めることが、一般的な趣旨説明だけではむずかしいと判断。そこで考えたのが、「山の基礎知識について親しみやすいQ&A方式で紹介しよう」

というものだ。

パンフレットに使用した用紙は、ごく一般的なA4正寸。これを「Z折り」という折り方にして、「山の日」制定に関するメッセージを表紙の裏側に、そして表紙を左に開くと質問、右に開けば回答、というページ展開を考えた。

設問の内容については、「日本の山のことを探してもらう」をテーマに、プロジェクトチームのメンバーで話し合って10問を設定。山岳会会員ならこんなのが常識! というレベルから、ちょっと考えさせる問題まで、難易度のバランスには配慮したつもりでいる。とはいっても、設問はともかく、解説に苦労した部分も少なくない。その極めつけが第一問の「日本に山はいくつある?」。

今回の回答については、1999年に刊行された『日本山名総覧』(白水社)を参考にさせていただいたが、この本のなかで著者の武内正さんは、国内の二万五千分の一地形図約4400枚に掲載された山の数を精査され、さらに調査を続けていると書かれている。初版から10年以上が経過した今、その数に変化はないものか、あるいは

は山の数を確定できないものか、直接、ご本人に尋ねてみた。以下にそのやりとりを紹介しよう。

「まず、地形図の自然地名の記載方法には大きく分けて、斜形体文字と直立体文字があります。山名は斜形体文字に含まれ、直立体文字は地点名ということですが、剣岳北方稜線の滝倉山などは直立体文字です。これら直立体文字の名称のうち、どれを山名として扱うかによって数が変わってきます」

——山名としての認識そのものが出発点になるわけですね。そういうえば剣岳北方稜線の白ハゲや赤ハゲなど、「山」や「岳」がつかないピークもあることですし……。

「また、地形図に記載された山名も日に日に数が変わっています。関空や静岡空港ができる際にはそれぞれ2山ずつ消滅していますし、宅地造成で消滅する山も多くあります。逆に、新規に記載される山名もたくさんあります。現在それらを電子国土で精査していますが、この作業も今後3年ほどかかると思います」

——本当に消えてしまう山もあれば、生まれてくる山もあるということがありますか。たしかにこれでは数

を確定することは難しい……。

「しかし、これがすべて終わつたとしても完璧ではありません。それは、新規発刊された地形図に新たに記載された山名が、電子国土に記載されていない例がたくさんあるからです。二万五千図約4400枚のうち毎月発刊されるのは30枚ほどで、私はそのすべてを購入していますが、この程度の数では、現在どのくらいの山が記載されているかは調べようがありません。現在、私のデータは三省堂の日本山名事典として活用されています、このフォローを三省堂と協力して行なっています。そのために、そこには地形図に記載された以外の山名もたくさん収録されていて、索引が複雑に入り組んでおり、地形図記載の山だけを抽出することが困難です。

日本山名事典には峠や高原等も含まれていますが、あえて純粹に山名と思えるものを数えると1万9100山余りと思われます。ただし、これには地形図記載以外の山名や北方領土の山も含まれています。事典の発刊は2004年ですが、それから現在までにかなり増減がありますので、上述の数も

現状を表わしてはいません

——98年にお調べになつた二万五千図掲載の1万6700山に、さらに増減があるということですね。「地形図記載以外の山名はもつとたくさんありますが、地元の人気が知らないなかつたり、ガイドブックの著者が命名した山などがあり、どこで線を引くかが非常に難しいのです。また、富士山や乗鞍岳などは、そのような名称のピークは地図上に存在せず、これら広域山名をどのように数に入れるかも難しいですね」

——八ヶ岳も大雪山も、名前そのもののピークは存在しないわけですし、逆に八ヶ岳横岳にある鉢岳や二十三夜峰といったピークをどうする? といった問題も出てくるわけですね。たしかにこれでは明快な数字など、出すことが難しいということがよくわかりました。ありがとうございました。

*
「日本に山はいくつある?」。この問題を調べるだけでも、山について深く考えさせられた。ほかにも動物、植物、地形、歴史などなど。山の世界は本当に奥が深く、楽しいものである。

トピックス

埼玉支部、30番目の支部として発足

大久保春美

4月4日、「さいたま市民会館おみや」において日本山岳会埼玉支部の設立総会が開催され、全国30番目の支部が発足することになった。

昨年来、支部設立に向けて準備

会、発起人会を立ちあげ鋭意準備を進めてきたが、埼玉在住の日本人岳会会員294人のうち140人の入会希望者を得て、ようやく設立にこぎつけることができた。

総会には65人が出席、会員140人は全国で8番目の規模を誇る。創立総会では支部規約案、事業計画案、予算案などが審議され、支部役員の選出も含めて、すべて原案どおり承認された。支部長には石橋正美会員、副支部長には野村孝義会員、大久保春美会員をそれぞれ選出した。

来賓として出席された藤本慶光副会長からは、「日本山岳会は尾上会長のもとに、4つの大きなテーマを推進している。法人改革、若い人の入会促進、支部活性化、山

の日の制定である。①支部化により支部のメンバーでなければ実行できない企画で活動してほしい。

②仲間を増やして10セントアップをめざしてほしい」と、お祝いと激励のあいさつをいただいた。

支部の運営については、「会員一人ひとりが支部の構成員」であることを実感できる運営をめざし、できるだけ多くの会員が支部運営に参画できるような体制を整えることが当面の目標である。そのため、会員にはできるだけ各専門の委員会に所属していただくよう呼びかけることとする。

支部の目的であり活動の柱になる事業を6項目に分類し、①登山事業、②集会事業、③広報事業、④公益公開事業、⑤委員会事業、⑥その他の事業とした。これらの事業を、集会委員会、山行委員会、広報委員会、自然保護委員会、総務委員会、安全登山委員会、社会貢献委員会の各専門委員会が連携しながら事業を進めていくことになる。



4月4日、30番目の支部として創立総会が開催された

の他多くの支部から祝電を頂戴した。席上、支部の設立を心待ちにしていたという意見も多く聞かれ、今後の支部運営の話題に花が咲いた。

記念山行は、総会の翌週4月11日に奥武藏の丸山で催した。天候に恵まれ、32人が新緑と桜が咲き始めた春の山を楽しんだ。奥武藏随一の展望を誇る山頂では、目にする山名を指呼したり、登山ルートや山の特質などの話題でにぎわった。そして参加者の自己紹介、続いて全員での大合唱。若いころを思い出しながら、大人数の山行を楽しんだ。

支部会員の平均年齢は66歳に近いが、高齢であることは決してマイナス要素だけではない。山歴はもちろん、さまざまな分野において深い見識をもつ会員がそろつているのも高齢者の集まりでもある。もちろん、さまざまな分野において深い見識をもつ会員がそろつているのも高齢者の集まりでもある。新しく知り合った会員が、新しい支部の特色である。新しい知己を得て、お互いに学び合い、山の楽しさを共有できるのも支部設立の大いなる効用であろうか。より多くの会員の支部への入会を歓迎したい。今後は先輩支部の活動を手本にしつつ埼玉独自の充実した支部運営に大いに励みたい。

カルチャ-

織内信彦さんの「魂の本」『伊犁紀行』 日本山岳会図書室へ

江本嘉伸

2002年9月に旅立たれた日本山岳会元副会長、織内信彦さんが秘蔵していた日野強の『伊犁紀行』初版本がこのほど日本山岳会に寄贈された。

愛媛県出身の陸軍軍人である日野強は、初めてカラコルム峠(5671メートル)を越えた日本人として知られる。中国語が堪能だったため、陸軍参謀本部から中国新疆省への視察を命じられた。天山北路の中国・ロシア国境にある伊犁の情勢を把握することが主目的だった。日露戦争直後、1906(明治39)年7月のことだ。

天山山脈を越え、中央アジアを横断する1年4ヶ月の旅の記録をまとめたのが『伊犁紀行』で、「情報報」を任務とする軍人が堂々と出版できたことに驚く。

『伊犁紀行』は「陸軍歩兵少佐日野強」を著者として明治42年5月29日、東京・日本橋の博文館から発行された。上巻「日誌之部」

と下巻「地誌之部」に分かれており、価格はそれぞれ「壹円參拾錢」。

日本人のシリクロード探検の第一章ともなったこの本を、シリクロードに強く惹かれていた織内さんは1939(昭和14)年、27歳の時に入手したらしい。表紙裏に貼り付けられている領収書で、「昭和14年12月28日、本郷区本富士町の玉英堂書店で購入」したことわかるのだ。購入価格は拾五円。

東京農大を卒業した織内さんは当時、陸軍糧秣本廠の研究室で仕事をしながら、雪洞実験のため武能岳から谷川岳を縦走するなど登山活動を実践していた。

「頭痛は到底如何ともし難く、耳鳴り眼眩まんとし、人馬相共に鼻腔より血を滴らすに至る」

人も馬も鼻血を出しながら、カラコルム峠を越えた、というのである。ついに到達した峠は、風が強く、雪も氷もまつたくなかつた。しかし、峠を越えてインド領に入つた途端、氷河におおわれた世界となり、難儀が続いた。最後はまったく動けなくなつてしまい、「突如一強力進み來りて予を背負ひ……」とガイドに背負われて氷河を越えたことも正直に書き残している。

織内さんは、妻に先立たれ、ホームでのひとり暮らしを決意した段階でほとんどの蔵書を整理している。しかし、この貴重本だけは

言うまでもないとして、いちばん最初に読んだのがたしか陸軍歩兵少佐日野強の『伊犁紀行』、次いでサ・エリック・タイクマンの『トルキスタンへの旅』であつたと思う」としている。

日野がカラコルム峠に達したのは、1907年10月1日だった。

同書の316ページの「山道第一の高嶺喀喇崑崙の超越」という文章がその時の緊迫した様子を伝えていく。

「あの時、僕の原点は日野強、ヘデイン、ヤングハズバントだと、おっしゃいました」。

宮澤さんは織内さんの形見の書として大切に保管していたが、昨年、突如リンパ癌を宣告された。一時は「寛解」にまで至つたが、その後脳動脈瘤が発見され、自分の持ち時間を考えるようになつた。そしてこの希少本を山岳会に寄贈することを決められた。

私は晩年の織内さんを何度も訪ねる機会があつた。2002年9月26日、病室での最期の時にも居合わせた経緯もあり、墓碑銘として神長編集長とともに織内信彦著『もうひとつのか晴の山』という本をつくつた。その縁で『伊犁紀行』贈本顛末を書かせてもらつた。

宮澤さんのご快復を祈りたい。

手元に残してあつた。その本が日本山岳会に寄贈されたのは、宮澤美渚子会員の意志によるものだ。

宮澤さんは、晩年、織内さんの身近にいて長女の章子さんとともに世話をされていた。ある日章子



資料映像委員会

フィルム・アーカイブ『白き氷河の果てに』を上映

資料映像委員会では、作品観賞のほか、映像の持つ記録性と資料性を知つていただくことを目的に、随時映画会を開催している。

3月12日、『白き氷河の果てに』を山岳会104号室で上映した。

この映画は、1977年、日本山岳協会が派遣した「日本K2登山隊(吉沢一郎総指揮・新貝勲隊長)」の本格的長編山岳記録。人間の限界に挑んだヒューマン・ドキュメンタリーである。

K2に挑んだのは、日本人47名(映画班含む)、パキスタン人隊員3名ほか15名、資材35㌧、ローカルボーター延べ1万6000人からなる登山隊だ。総経費2億円(映画撮影費用含む)、日本人隊員38名最大の隊である。日本人隊員38名

庄巻は氷河のキャラバンだ。5月26日、カラコルム入口のスカルドを出発。バハー村から先は、35トンの資材を人の背で運ぶしかない。キャラバンの前に氷河が立ちかかる。隊員が先導し急流を渡り、見本を示すが、ボーターたちはすつかりおびえてしまい、河を渡れない。仕方がない、ルート変更だ。そして半月以上ものキャラバン最後の日、はじめてK2を望む。「あれがK2だ」、隊員が指差すその峰を望むゴドワイン・オースティン氷河にBCを設営。

そこからC1、C2と順調にルートを延ばしていく。なかでも、C3からC4の荷揚げは最も苦しいものとなる。隊員たちはまだ酸

は、全国(15都道府県)から選抜された選りすぐりの精銳たち。隊員たちは過酷な自然のなかをカラコルムへ、未知の世界・K2の頂へとひたすら進む。

8月4日、第一次アタック、「風雪激しく前進できず……」失敗。8月5日、6日は吹雪。このまま終わってしまうのか。

8日、晴天だ。C5のテントで吹雪に耐えながら待っていた二次隊がアタック開始。午前5時出発、胸から首までのラッセル、ロープ切れ、遅々として進まない。ベスキヤンプには、またも重苦しい空気が漂う。苦悩する顔、顔、顔……、思い、祈り、焦り。またも、このまま終わってしまうのか。

さらにこの映画を引き立てるのが音楽とナレーションだ。音楽／いづみたく、作詞／岩谷時子、唄／上条恒彦、ナレーター／中村吉右衛門。カラコルムの素晴らしい山岳景観と、苦闘する山男たちの心理描写がいつそう際立つ。

「こちらアタック隊、ただいま登頂に成功しました。ここより高い所はありません……」午後6時45分、重廣隊員のうわずった声。キヤンプ内に歓声がわく。

9日、三次隊も登頂に成功。しかし10日はまたしても吹雪。四次隊のアタックは中止となつた。

山男たちの明暗を分けたアタック、その感動の裏は残酷もある。指揮する隊長・副隊長の表情、森田隊員の思わず下山、登頂を逸した寺西隊員と馬場口隊員の雄たけびと慟哭……。ワンシーン、ワンシーンが重くてせつない。

これら人間の感情を、登山という観点から見事にとらえた監督は門田龍太郎。登頂の瞬間は、K2と氷河1本へだてた6900㍍の無名峰に陣取り、2400㍍の超望遠レンズで山頂を狙っていたといふ。撮影は山岳映画のカメラマン阿久津悦夫ら6人のカメラワークによるもの。

さらにこの映画を引き立てるのが音楽とナレーションだ。音楽／いづみたく、作詞／岩谷時子、唄／上条恒彦、ナレーター／中村吉右衛門。カラコルムの素晴らしい山岳景観と、苦闘する山男たちの心理描写がいつそう際立つ。

文部省特選、文化庁優秀映画奨励賞受賞作品。上映123分。

(奈良千佐子)

エベレスト登頂の新聞報道と 「ザ・エベレスト・デー」

4月24日、日本山岳会エベレスト登山隊登頂40周年を記念したイベント、「ザ・エベレスト・デー」が東京・国立オリンピック青少年センターで開かれた。1970年5月11日、日本山岳会隊の松浦輝夫隊員と故植村直己隊員の2人が、日本人で初めて世界最高峰エベレスト(8848メートル)に登頂した。その後も、日本隊がエベレスト登山で活躍。日本のヒマラヤ登山の歴史を飾るエベレストに挑んだ登山家たちのトーキショードであつて、会場は300人を超す参加者で満員の盛況ぶりだつた。



大塚登攀隊長をはじめ壇上には当時の隊員が並んだ

70年の日本山岳会隊のメンバーだった大塚博美登攀隊長らが語る当時の状況を聞いて、隔世の感があると思った。話のなかで「第一次偵察隊」とか「頂上に登るための戦略」とかの言葉が入り、まさに國家的な威信をかけた登山だつたことが伺える。報道を含む隊員は39人とシェルパ26人、装備や食料は約30トン、総費用1億1450万円のビッグプロジェクト。

当時の新聞報道でも、その注目ぶりが伺える。

70年5月14日の朝日新聞夕刊一面は、白抜きの横見出し「日本隊、エベレスト登頂」で一面トップ記述だつた。高所医学やルート工作、登山用具などを考えれば、70年のエベレストはまだまだ「難攻不落」に近い難峰だつたわけだ。日本人初登頂者の松浦さんは「山頂に立つた瞬間、植村と抱き合つて背中をたたき合つた。目から涙がボロボロこぼれた」と登頂の思い出を語つた。

75年5月16日、日本女子登山隊が女性として世界で初めてエベレスト登頂に成功。このニュースは翌日の夕刊一面で報じられ、カトマンズの AFP 通信がネパール外務省の発表として伝えている。見事だ。カトマンズのロイター通信が報じていて、ニュースソースは、カトマンズの日本大使館の発表だという。ただ、登頂日から3日遅れの情報で、現在の衛星電話やインターネットによる速報に比べて、通信事情ひとつ見ても、現在のヒマラヤ登山とは隔世の感がある。

ちなみに、日本山岳会隊の17年前に初登頂した英國隊の新聞報道

ということだ。

しかし、今回のトーキショードで、

70年の日本山岳会隊のメンバーだった大塚博美登攀隊長らが語る当時の状況を聞いて、隔世の感があると思った。話のなかで「第一次偵察隊」とか「頂上に登るための戦略」とかの言葉が入り、まさに国家的な威信をかけた登山だつたことが伺える。報道を含む隊員は39人とシェルパ26人、装備や食料は約30トン、総費用1億1450万円のビッグプロジェクト。

当時の新聞報道でも、その注目ぶりが伺える。

70年5月14日の朝日新聞夕刊一面は、白抜きの横見出し「日本隊、エベレスト登頂」で一面トップ記述だつた。高所医学やルート工作、登山用具などを考えれば、70年のエベレストはまだまだ「難攻不落」に近い難峰だつたわけだ。日本人初登頂者の松浦さんは「山頂に立つた瞬間、植村と抱き合つて背中をたたき合つた。目から涙がボロボロこぼれた」と登頂の思い出を語つた。

80年代は中国がチベットからのヒマラヤ登山を開拓し、日本隊が新たなルートでエベレストに挑戦する。しかし、登頂者が増えるにつれて報道は縮小気味になった。88年の日本・ネパール・中国友好登山隊は5月5日、交差縦走に成功したが、朝日新聞は翌日の夕刊社会面のベタ記事だった。

最近のエベレストは必ずしも組織で挑む山でなく、個人でも登頂できる山となつた。それでも、世界最高峰が登山家たちの憧れの山であり続けることは変わらないだ

「日本隊、田部井さん成功」だつた。日本女子隊の11日後、チベット側から中国隊が登頂した。当时、中国はエベレストに挑んでいることを内密にしていた。女性初の登頂者となつた田部井淳子さんは「無線に時どき中国語が入るので、ひよつとしたら中国隊も登つているのかな、と気になつていた」そうだ。中国隊の登頂メンバーにチベット人女性の播多隊員がいて、田部井さんはわずか11日違いでロンドンのバッキンガム宮殿が発表している。

日本山岳会隊は史上6番目の登頂だつた。高所医学やルート工作、登山用具などを考えれば、70年のエベレストはまだまだ「難攻不落」に近い難峰だつたわけだ。日本人初登頂者の松浦さんは「山頂に立つた瞬間、植村と抱き合つて背中をたたき合つた。目から涙がボロボロこぼれた」と登頂の思い出を語つた。

80年代は中国がチベットからのヒマラヤ登山を開拓し、日本隊が新たなルートでエベレストに挑戦する。しかし、登頂者が増えるにつれて報道は縮小気味になった。88年の日本・ネパール・中国友好登山隊は5月5日、交差縦走に成功したが、朝日新聞は翌日の夕刊社会面のベタ記事だった。

最近のエベレストは必ずしも組織で挑む山でなく、個人でも登頂できる山となつた。それでも、世界最高峰が登山家たちの憧れの山であり続けることは変わらないだ

出しひ「女性初のエベレスト登頂」「日本隊、田部井さん成功」だつた。日本女子隊の11日後、チベット側から中国隊が登頂した。当时、中国はエベレストに挑んでいることを内密にしていた。女性初の登頂者となつた田部井淳子さんは「無線に時どき中国語が入るので、ひよつとしたら中国隊も登つているのかな、と気になつていた」そうだ。中国隊の登頂メンバーにチベット人女性の播多隊員がいて、田部井さんはわずか11日違いでロンドンのバッキンガム宮殿が発表している。

日本山岳会隊は史上6番目の登頂だつた。高所医学やルート工作、登山用具などを考えれば、70年のエベレストはまだまだ「難攻不落」に近い難峰だつたわけだ。日本人初登頂者の松浦さんは「山頂に立つた瞬間、植村と抱き合つて背中をたたき合つた。目から涙がボロボロこぼれた」と登頂の思い出を語つた。

80年代は中国がチベットからのヒマラヤ登山を開拓し、日本隊が新たなルートでエベレストに挑戦する。しかし、登頂者が増えるにつれて報道は縮小気味になった。88年の日本・ネパール・中国友好登山隊は5月5日、交差縦走に成功したが、朝日新聞は翌日の夕刊社会面のベタ記事だった。

最近のエベレストは必ずしも組織で挑む山でなく、個人でも登頂できる山となつた。それでも、世界最高峰が登山家たちの憧れの山であり続けることは変わらないだ

（近藤幸夫）

東西南北

N

S

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度でお願いします）

女性の冬季富士山 初登頂の通説と行方

長田義則

一周忌を迎える故・中村テル名譽会員は、昭和2年正月に富士山に登った。

1月5日の静岡民友新聞は、「一
行は同夜二合目石室に一泊、二日
未明満月一面硝子張りの如く氷結
した積雪を、カンジキとアルペン
ストックを力に、互にロップで身
体をしばってつなぎ合い、ついに
午後二時頂上に達し、浅間神社奥
宮に詣で、直ちに引きかえし、三
日前零時無事に下山した。一行

の談によると、目下馬返し以上は
積雪深く、八合目に達したとき一
行は、何れも睡魔におそれ、万
一眠ればそのまま凍死するので、
互に気をつけ、呼び合つて登つた。

1月5日の静岡民友新聞は、「一
行は同夜二合目石室に一泊、二日
未明満月一面硝子張りの如く氷結
した積雪を、カンジキとアルペン
ストックを力に、互にロップで身
体をしばってつなぎ合い、ついに
午後二時頂上に達し、浅間神社奥
宮に詣で、直ちに引きかえし、三
日前零時無事に下山した。一行

の談によると、目下馬返し以上は
積雪深く、八合目に達したとき一
行は、何れも睡魔におそれ、万
一眠ればそのまま凍死するので、
互に気をつけ、呼び合つて登つた。

これは「女性の初登頂」の通説
だが、思いもよらずテルさんの記
述に、「黒田米子さんが大正13年に
冬の富士山に登っている」とある
のを初めて知った（会報『山』7
77号「山を語る」）。

「山の明け暮れ」の「婦人と登山」
の文中に、黒田の苦闘に耐えた登
山の思い出は、昭和6年4月の氷
雪の穂高登攀で、先年登った雪の
富士山の八、九合目の急峻にたと
えている。この先年も昭和4年の
富士山にて」と推察。

テルさんの寄せた文章が、筆述
のものか、口述取材のものかは判
定に中村の富士山の話は聞いたが、
ほかの人の話は聞かされなかつた。

静岡支部の「もみじ会」に両女
史とも3~4回参加。いつもの座
談に中村の富士山の話は聞いたが、
ほかの人の話は聞かされなかつた。



昭和2年元旦、女性初の富士登山のとき、浅間神社でお祓いをうける一行。右から根上、中村テル、梶房吉、福田屋主人（『長い坂——現代女人列伝』から）

「山の明け暮れ」の「婦人と登山」
の文中に、黒田の苦闘に耐えた登
山の思い出は、昭和6年4月の氷
雪の穂高登攀で、先年登った雪の
富士山の八、九合目の急峻にたと
えている。この先年も昭和4年の
富士山にて」と推察。

テルさんの寄せた文章が、筆述
のものか、口述取材のものかは判
定に中村の富士山の話は聞いたが、
ほかの人の話は聞かされなかつた。

おそらく中村がさらりと言つた
「米子さんも4年（昭和）に冬の
富士山を登っている」が、西暦1
924年→大正13年との取り違
い、テルさんの「初登頂」の通
説は、搖るぎないものと判断する。
横有恒も中村のあと、2月の富
士山に登っている（注2）。



ディック・バス著『七つの最高峰』

もうひとつの人生が
50歳からはじまる!

(注1) 御殿場市の仁藤祐治・著
『岳麓漫歩』七巻の記事を引用。
(注2) 深田編『富士山』、楳『富士の冬』は楳有恒全集に未収録の山行。

公募登山について

鈴木正規

最近、登山家の間では8000
メートル峰をいくつ登ったとか、七大陸
の最高峰を登った、深田百名山を
全部登ったなど、ピークの数ばかり
が話題になっているようだ。そ
して、登山者自身もそれとらわ
れているような感じを受ける。

1985年、アメリカの実業家
ディック・バスは、登山経験は少
ないが多額の費用と登山ガイドを
用いて、七大陸最高峰登頂を達成
している。そして、自らその記録
を綴った本『七つの最高峰』を出

版した。だが、そのことに異論が
でた。なぜなら、七大陸登頂競争
のスタートが旅行会社のガイド引
率によるものだつたからだ。

エベレスト挑戦は6万5000

ド(日本円で620万円)、南極最
高峰挑戦で2万8000ドル(27
0万円)だという。ペーパー1枚
の登山計画書にこれらのタイトル
をつけ、売りものにした登山ガイ
ド付きツアーや盛んに行なわれて
いる。多くのお客様を集めて、ヒマ
ラヤでは固定ザイルを張りめぐら
せ、酸素を何十本も吸わせて、頂
上まで引っ張りあげて記録を達成
させている。

思うに登山の難しさとおもしろ
さは、登山計画、高度の登山技術、
危険の判断などではないだろうか。
その多くを登頂請負人のガイドに
ゆだねてしまう。つまり、お金と
時間とやる気があれば七大陸最高峰
は登山経験のない誰にでも挑戦
できるものになつていて。もはや
そこに死の臨場感や孤独でつぶさ
れそうになる精神状態はない。

さて話をディック・バスに戻そ
う。バスがエベレストという最後
の登頂を手に入れるのに支払った
対価は尋常ではなかつた。いくつ

もの公募隊に参加して失敗したあ
げく、最後にはクリス・ボニント
ンをふくむ強力なノルウェー隊の
ガイド役デイヴィッド・ブリーシ
ヤーズを連れて加わつたのだが、
いずれの場合も1人の隊員以上の
金額を出し、時には一つの隊まる
ごとのスポンサーにもなつたこと
もある。ここまでくると個人の道
楽としてもあまりのことである。
多くのセブンサミッター志願者
にとつての問題は、山としては桁
違いの世界最高峰に登らなければ
夢は完成しないということだ。た
とえ酸素がふんだんに与えられ、
シェルパのサポートが万全であつ
ても、そうたやすいことではない。
経済的にもかなり無理をしなけれ
ば事は成りえない。

一方、引率するガイドはどうだ
ろう。登りたいお客様の熱意を尊重
しそうなり、登らせたい願望にか
まけて、ひとたび判断とバランス
を欠くことになれば、大きな惨事
となる。1996年のジョン・ク
ラカワーの『空へ——エヴェレス
トの悲劇はなぜ起きたか』のよう
な、隊全体の遭難の悲劇に陥る危
険性すらある。

私の登山感

松岡繁

ろう。そして、創立100年以上の伝統と実績を、自覚、認識してほしい。

私が、本格的に登山を始めてから62年が経過した。18歳（昭和22年）から20歳（昭和24年）頃は、全国の主要都市もB-29による戦略爆撃で、廃墟（焼け野原）となつた。ちまたには、戦災孤児（物乞い、靴磨き）や、復員兵（栄養失調の元軍人）があふれ、衣食住は貧しく粗末であつた。そんな時代であつたが、北アルプス、八ヶ岳、巣鴨の那須連峰縦走、富士

山、三ツ峠などへ先輩たちと山行した。合宿の天幕内（ワインバー型テント）では、雑炊、お粥、乾燥芋と質素だつた。世間の冷ややかな視線に戸惑い、気兼ねしながらの、釈然としない登山だつた。

その後、25歳頃から30歳代、40歳から70歳代に登山活動を堪能することができた。社会人になり、サラリーマン生活の有給休暇を活用して、東京付近、関東周辺、中部・東北地方の名だたる山や峠を登つた。職場の仲間との山行も多

い。

仲間3名と茅ヶ岳（1704メートル）と瑞牆山（2230メートル）に登山した。両日とも無風、快晴のなかゆつくりと登高し、山頂からの大景観を眺め、疲れと急坂の試練を克服した。高尚で健全な登山活動により楽しい人生と、心の珠玉を修得した思いであつた。

私はこれまでの経験から全員が無事に下山することが重要であり、至福の登山だと考えている。そのためには、5月、6月の穂高岳、夏の奥又白や剣岳真砂沢では、近くのパーティにあいさつと登攀ルート（雪渓にあるクレバスやシュ

川岳（西黒沢→西黒尾根→トマの耳→土合駅）に登つた。山行前には準備打ち合わせ（装備、食料、行程など）を数回行なつた。企画案内・引率のため、目標の山や峰に踏査下見も実施した。事故もなく、安全な登山を続けたこともあり、職場の上司や同僚から信頼され、感謝された。その結果、職場の全員が山行に参加し、頂上をきわめ、大自然を満喫して感動した。

現在、私は超高齢老練登山者の部類ではあるが、昨年11月上旬に

の情報交換も必要だろう。厳冬期・残雪期に富士山を志す登山者は佐藤小屋に宿泊し、小屋の主人から雪質、雪崩対策（早期発見と回避）、登山コースの選定、風の状態、滑落防止などを教えてもらう姿勢がほしい。

そして皆さんにも、高尚で健全な登山活動をずっと続けていただきたいと思う。



大森薰雄 (おおもり・しげお)
1933年 岐阜県吉城郡神岡町(現飛騨市)
に生まれる
1960年 東京慈恵会医科大学卒業
1960年 日本山岳会入会
1970年 日本山岳会エヴェレスト登山隊
参加
1978年 神奈川県立厚木病院整形外科医
として勤務
1981年 丹水会発足(創立会員)
1993年 厚木病院院長に就任
1997年 日本山岳会副会長に就任
1999年 厚木病院退職
1999年 横須賀老人ホーム付属診療所長
2009年 日本山岳文化学会会長に就任

著書に『雲の上の診療所』『膝の痛みを治す』『中高年のための登山医学』『ぼくは勤務医』など多数

かつて会の副会長にも就任され、また1970年エベレスト登山隊にも参加された大森薰雄さんが、肺がんのため喜寿を目前にした本年4月24日に急逝されました。

大森さんは、整形外科医として神奈川県立厚木病院に勤務されておりました。在職中は多くの会員の方もお世話をになり、その間忙しい病院長としての激務に励まれておられるかたわら、山岳関係の多

追悼・大森薰雄さん

古谷聖司

★
追
OBITUARY

悼

くの団体のお手伝いに出向かれておられたとも聞いております。

私どもの丹水会では、創立仲間として組織立ち上げからお世話になりました。以後、会の運営面などで多くの影響を受けました。

丹水会の発足のきっかけは、当時山岳会の関東地区には支部制度がなく、地域の会員同志のコミュニケーションの場が必要だというところからスタートしました。県の中央地区に住んでいた私や、厚木病院に勤務されていた大森さん

この大森さんのご提案の根底にあつたのは「山の仲間はみんな楽しく、仲よくやるのが信条だ」ということで、幹事を引き受けた若い仲間たちは集会のたびに、大森さんからこのことを幾度となく聞かされたものでした。以後25年間、この原則は不文律として引き継がれ、これが功を奏してか集会の案内を発送した数は100名を超えたときもありました。

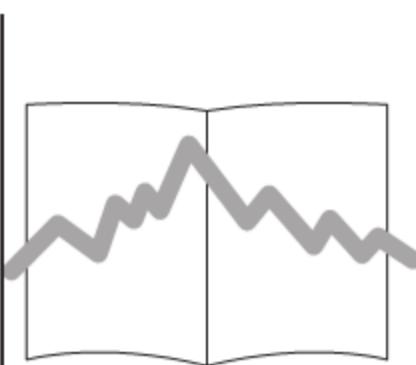
山岳会の同好会への取り組みができる、丹水会ではこの大森さんの考え方を貫かれ、山岳会会員外の人を幹事にしたり、構成員として迎え入れることにしています。また大森さんの人柄を慕って入会され、続いて山岳会の会員になられた方も多くおられます。そういう意味で大森さんは人間関係を大切にし、個性の強いといわれる山

などに声がかかり、会員が手軽に集まる、ささやかな会でいいから立ち上げようという願いから発足しました。窮屈な会員制はとらず、会友制とし、会友は全員平等、入るのは拒まず、入退会は自由、会費も徴収しない、の3原則を提案されたのも大森さんだと記憶しています。

男たちからもいろいろな役を依頼され、いやな顔もせず引き受けられ、うまく処理しておられました。私どもの丹水会の運営でも見習わなければならぬことだと思つております。

さらに著書のなかでは、スポーツドクターという立場と専門分野から、山登りの安全と健康に焦点を合わせた何冊かが上梓されたほか、毎年欠かさず通われた槍ヶ岳診療所での記録では、下界では想像もできない山中事故の苦労と悲惨さを訴え、一般市民への山の安全と日常の健康という面で、なにより啓発をされてきました。

お亡くなりになる1週間ほど前に、病院にお見舞いに伺つた折にも、丹水会の灯だけは絶やすないと病床から懇願されたことが心を過ります。



図書紹介



塩野米松・著

『初代竹内洋岳に聞く』

初代
竹内
洋岳
に聞く



塩野米松

2010年3月
アートオフィスプリズム・
丸善出版事業部刊
四六判 540頁
定価 1995円

また「不思議な竹内洋岳」は、
塩野氏練達の筆によるもので、東西トーザイと呼びかけたくなるほどおもしろい。読んでいるのに、目前で話を聞くようなライブ感がある。

もとJACの若い会員だった竹内洋岳さんを覚えているだろうか。地球上に8000メートル以上の頂は14座。このすべてに登ったのは世界でたつたの18人。いま、日本人でこの14サミッターに一番近く、残りあと2座と迫る登山家だ。

全13章からなるこの本には、その竹内さんの少年時代から、12座目・ローツエ登頂までの半生記が綴られている。

著者は、アウトドアライターで聞き書きの名手としても異才を放つ作家・塩野米松氏。2年間200時間に及ぶインタビューから生

まれた「不思議な竹内洋岳」は、塩野氏練達の筆によるもので、東西トーザイと呼びかけたくなるほどおもしろい。読んでいるのに、目前で話を聞くようなライブ感がある。

祖父から受け継いだ江戸子氣質（第1章）の語り口は自在ではつらうとして、これがすこぶる痛快。話は8000メートル峰14座を目指す大変なクライミングに移り、まず組織的登山から始まる（第2～6章）。そのなかには、JACへの辛口な部分もあるが、彼の批評は真っ当だ。退会の理由は、組織登山と老人が多いからではなく、組織から離れた登山がしたいと覺悟したからだ。とはいっても元気もある若者の芽を摘むようなJACに、あきれ返った結果でもあるようだ。

さて、組織的な登山から、2001年のナンガパルバット（第7

章）で彼の登山は大きく離陸する。そしてGII（第9章）で雪崩というとんでもない事態から奇跡的に生き還する話では、手に汗にぎる。生と死を分かつものを運とは言わず、背骨にシヤフトを入れるほど過酷な事故から復活する。そして、GIIとブロードビーグ（第12章）、ローツエ（第13章）で不死鳥のごとく復活。みごと登頂して、残りは2座を残すのみとなつた。道具（第11章）については、メー

カー、製品名、彼自身の使い方まで具体的に記述、さらに天気予報の情報も大変勉強になる。衛星電話といつた通信機器が登山をリアルタイムなものに変え、現在の高所登山はより個人的で、世間に広く発信するものになつてているという事も教えてくれる。

彼の登山観はきわめて明快だ。美しい登山がしたい、ルールは自分で決めてフェアに頂上に立つ、その過程をきちんと説明するなど自分に潔癖で冷静だ。頂上に登ることだけを目的とせず、ダメなら帰ってくる。登山家のワクに納まらない、おしゃれでスタイルッシュな登山家の出現は新鮮だ。反面、ジャン・コストの『山に登る心』

著者は北海道在住の女性、40歳から本気で取り組んだ山登りが、やがて「七大陸の最高峰登頂」に結実する。山で泣き、山で笑つた幸せと、命をかけた真剣勝負が、ギュッと詰まつた一冊である。

山への思いがどんどん加熱して、マウンテンホリックに陥つた著者

をしてGII（第9章）で雪崩というとんでもない事態から奇跡的に生き還する話では、手に汗にぎる。生と死を分かつものを運とは言わず、背骨にシヤフトを入れるほど過酷な事故から復活する。そして、GIIとブロードビーグ（第12章）、ローツエ（第13章）で不死鳥のごとく復活。みごと登頂して、残りは2座を残すのみとなつた。道具（第11章）については、メー

カー、製品名、彼自身の使い方まで具体的に記述、さらに天気予報の情報も大変勉強になる。衛星電話といつた通信機器が登山をリアルタイムなものに変え、現在の高所登山はより個人的で、世間に広く発信するものになつているという事も教えてくれる。

書名がなぜ『初代竹内洋岳に聞く』なのか――。謎は後日のお楽しみとし、14座登頂後に今度は彼が自分の山登りというものを客観的に残すために、本人が書き下ろすことにして期待しよう。彼の公式ブログもおもしろい、こちらも覗いてみてほしい。

（絹川祥夫）

久末眞紀子・著

『世界のてっぺんに立つた！熟年女性7大陸最高峰制す』



2010年3月
北海道新聞社刊
四六判 304頁
定価 1575円

著者は北海道在住の女性、40歳から本気で取り組んだ山登りが、やがて「七大陸の最高峰登頂」に結実する。山で泣き、山で笑つた幸せと、命をかけた真剣勝負が、ギュッと詰まつた一冊である。

が、45歳からの10年間に七大陸を目指していく途上で、さまざまの人との出会い、チャンスを自分のものにしていく前向きな意欲と、そしてタイミングとが相まって、絶好機をもたらしたのだと納得させられる。

持ち前の思いきりのよさが、世界最高峰でも發揮され、ノリにのった勢いは、まさにぶつけ本番の「エベレスト」という印象である。

「本当によく生還できたな」と思わずにはいられない登山内容を、著者自身が正直に明かしている。人の親であり社会人でありながら、好きな山に行くには、どう対応していけばいいのか、著者の甘えのない責任感のある行動に教えられる。

本書の後半は、軽いエッセイと著者の半生を短く綴っている。

2人の子どもを抱えての離婚。努力の人でありながら、楽天的発想の持ち主。山にかかる費用のやり繕りに苦慮しつつも、小さなザック一つで身軽に海外に一人旅に出るなど、やりたいことをやる。その自由さと行動力が、読者には共感と同時に羨望となるであろう。七大陸最高峰登頂「だけ」では

なく、山をこよなく愛する「だけ」の人生でもなく、還暦を迎えた今、海外で日本語教師の職に就こうと、そしていく前向きな意欲と、ものにしていく前向きな意欲と、そしてタイミングとが相まって、絶好機をもたらしたのだと納得させられる。

持ち前の思いきりのよさが、世界最高峰でも發揮され、ノリにのった勢いは、まさにぶつけ本番の「エベレスト」という印象である。「本当によく生還できたな」と思わずにはいられない登山内容を、著者自身が正直に明かしている。人の親であり社会人でありながら、好きな山に行くには、どう対応していけばいいのか、著者の甘えのない責任感のある行動に教えられる。

持ち前の思いきりのよさが、世界最高峰でも發揮され、ノリにのった勢いは、まさにぶつけ本番の「エベレスト」という印象である。「本当によく生還できたな」と思わずにはいられない登山内容を、著者自身が正直に明かしている。人の親であり社会人でありながら、好きな山に行くには、どう対応していけばいいのか、著者の甘えのない責任感のある行動に教えられる。

ヒマラヤ世界には、5000年の歴史をもつ文明が息づいている。その基礎にあるものは「共生」だ。そこでは、厳しい制約のもとで自然と共生の関係を保ちながらシェルパ族が暮らしてきた。しかし、現在、地球環境の変動化の影響を受けて、氷河湖の決壊や森林破壊が懸念され、平野部の村や農地にもさまざまな危機が訪れている。

著者はヒマラヤ世界を歩いていると、まさにそうした共生の反対の極に、日本を含めての「格差」の問題が浮かび上がってくるという。共生のうえに築かれてきたヒマラヤ世界の文明と、そこに、侵入しつつある「近代化」がもたらす自然破壊。しかし、ここには「豊かさ」ではなく、貧困の事実だけが残っている。それに対しても、日本は、ほかならぬ明治以来の近

代化によつて豊かさを実現しつつ、それとともに、現在のような問題を抱え込むことになった。とすれば、その日本と対比してみることによって、「離陸」をめざすヒマラヤ世界の問題も理解できるのではないかだろうか。

さらに、もうひとつ著者が指摘するのは、この世界を貫く驚くべき「無関心さ」だ。たとえば、街の道路に、子どもの死骸が放置されている。その上を、平気で車が通り過ぎる。ペちゃんこになつた男の子は、近所の人たちの知つてゐる子だつた。動乱、天災、飢餓を経ても続いてきた5000年の文明を生きるには、ここまで徹底した無関心さがなければ生き抜けないのかと考えてしまう。

最後に、著者は、環境保護運動のリーダーに面会する。賢者の風貌をただよわせた長老との会話を終えての別れぎわ、見送る目のなかに「5000年の英知」のこもつたまなざしを見て、それを「無関心」とは対極のものと感じている。だが、果たしてそこに、ほんとうの解決の可能性はあるのだろうか。問いは続いている、と言うしかあるまい。

(飯田年穂)



平成22年度第1回(4月度)理事会

日時 平成22年4月28日 18時35分

場所 日本山岳会会議室

【出席者】 尾上会長、宮崎・藤本各副会長、成川・岡部各常務理事、太田・堀井・山川・野澤・永田・萩原各理事、深川・平井各監事、酒井常任評議員

【委任】 神崎副会長、相馬・中山・谷川各理事、近藤・森各常任評議員

審議に先立ち4つのプロジェクトチームからそれぞれの活動進捗状況、課題・問題点等について対応状況の説明、報告とそれに対する質疑、意見交換を行なった。

【審議事項】

1・支部長就任（宮崎）

新支部長・東京多摩支部 竹中

議案として承認された。（承認）

【報告事項】

1・大学山岳部所有の山小屋の調査への協力（野澤）

信州大学工学部建築学科土木研究室（土本俊和教授ほか）から同部所有の山小屋調査について協力依頼があつた。協力をしていきた

い。

彰会員（12981）。支部新設・埼玉支部 石橋正美会員（8091）。支部長交代・信濃支部 飯村富彦会員（8768）、前支部長金子丞二会員（6511）1月逝去。

2・支部会費値上げについて（宮崎）

2・第12回同好会・同期会連絡会議（宮崎）

2・支部会費値上げについて（宮崎）

6月21日(月)に実施するのでご協力いただきたい。

3・平成21年度事業報告（案）、会員動向（宮崎）

3・平成21年度事業報告（案）、会員動向（宮崎）

熊本支部から支部会費の値上げ案（現行月額2000円から3000円にすること）の承認申請があつた。（承認）

3・平成21年度事業報告（案）、会員動向（宮崎）

6月21日(月)に実施するのでご協力いただきたい。

4・支部総会報告（宮崎）

6月21日(月)に実施するのでご協力いただきたい。

5・ルーム201号室の返却と102号室の改装（宮崎）

6月21日(月)に実施するのでご協力いただきたい。

6・平成21年度収支決算（案）、財産目録（案）（岡部）

6月21日(月)に実施するのでご協力いただきたい。

7・図書室蔵書の寄贈（岡部）

6月21日(月)に実施するのでご協力いただきたい。

8・山研開所予定（太田）

6月21日(月)に実施するのでご協力いただきたい。

9・第10回みやざき市民活動フェスティバル報告（宮崎）

6月21日(月)に実施するのでご協力いただきたい。

10・『山岳』61号の記事使用願い

6月21日(月)に実施するのでご協力いただきたい。

員会の協力をお願いしたい。

6・第4回日中韓交流学生登山とさよならパーティ案内（宮崎、野澤）

日中韓交流学生登山は5月13日(木)から上高地、穂高岳等で実施するが、登山終了後の5月17日(月)にさよならパーティを開催する。関係者に案内を出した。

平成22年度第1回通常総会

總務委員會

平成22年度の第1回通常総会が、以下のとおり開催されます。

日曜 6月12日(土) 午後2時より

場所 主婦会館 プラザエフ（東京・四ツ谷）

通常の事業報告や収支決算などの議案のほかに、公益法人制度改革法案の施行にともなう当会の対応について協議をいたします。

万障お繩り会わせのうえご出席ください。

なお今回、新制度移行の一環として、皆様へ議案の詳細をお送りしております。

(宮崎)
B u s

sh 山の会（会長 山本久
から、大町山岳博物館から
てに『山岳』61号掲載の深
氏の山川勇一郎氏に関する
使用について依頼があり承

11・法人実地検査（宮崎）

文科省競技スポーツ課から法人実地検査を22年度中に行なうとの連絡があつた。実施時期は調整中

儿々日誌
八月

長(一) 13・会報「山」5月号編集報告(神

新設の東京多摩支部が主幹で開催する。日程は支部長会議に合わせて、9月5日(日)～6日(月)で実施する方向で調整準備中。詳細については成案を得て別途報告をする。
13・会報『山』5月号編集報告(神長)
ルーム日誌 今月4
1日 フォトビデオクラブ
5日 総務委員会 高尾の森づくりの会
6日 図書委員会 スケッチクラブ 緑爽会 山の自然学研究会
7日 集会委員会 システムプロジェクト
8日 山の自然学研究会
9日 総務委員会 学生部指導委員会 九五会
12日 指導委員会 スキークラブ
13日 スケッチクラブ
14日 常務理事会 会報編集委員会 山岳地理クラブ 休山会 みちのり山の会
15日 科学委員会 海外委員会
17日 総務委員会 資料映像委員会 フォトビデオクラブ
19日 01会

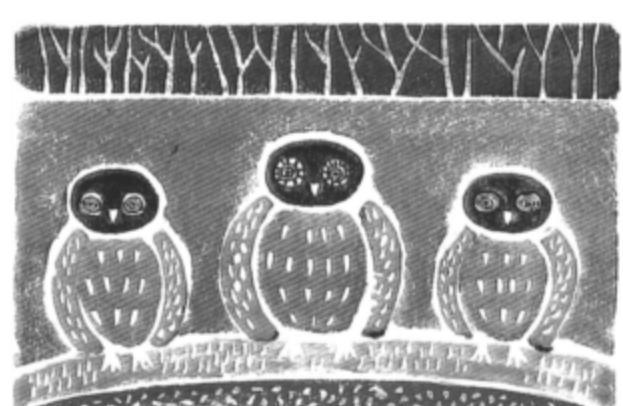
7日	集会委員会 システムプロ ジェクト
8日	山の自然学研究会
9日	総務委員会 学生部指導委 員会 九五会
10日	指導委員会 スキークラブ スケッチクラブ
11日	常務理事会 会報編集委員 会 山岳地理クラブ 休山 会 みちのり山の会
12日	科学委員会 海外委員会
13日	01会
14日	総務委員会 資料映像委員 会 フォトビデオクラブ
15日	
16日	
17日	
18日	
19日	

物故 会員異動(4月)

会員異動 (4月)							
	星	讓	(4803)	吉川尚郎	(5099)	大森薰雄	(5136)
知久健四郎	(6958)						
川 善市	(10014)						
古田寛昭	(11697)						
岩崎久夫	(13294)	10	10	10	10	10	10

	2	4	4	3	4	3	4

	27	26	13	22	24	13	6



村橋嘉一郎	(7 5 5 0)	岐阜
佐々木宏	(8 8 8 4)	秋田
吹田佳晴	(9 2 8 2)	京都
伊藤美明	(1 0 1 0 3)	
原利恵子	(1 0 6 7 5)	
松村 進	(1 1 0 5 3)	福井
高田昭則	(1 0 9 8 3)	
佐久間敏宣	(1 1 5 9 6)	
野嶋久美子	(1 1 8 6 0)	北九州
深井是之	(1 2 0 9 1)	秋田
藤巻忠雄	(1 2 3 8 9)	東海
中野洋史	(1 2 4 7 6)	
河野和子	(1 3 0 6 9)	宮崎
野中清義	(1 3 2 5 3)	山形
國井聖仁	(1 3 2 7 2)	宮崎
野嶋 豊	(1 3 5 2 7)	北九州
小原富子	(1 3 5 9 7)	
鬼塚まり子	(1 3 7 1 6)	宮崎
竹内俊夫	(1 3 7 9 6)	北海道
室省二郎	(1 4 1 2 7)	福井

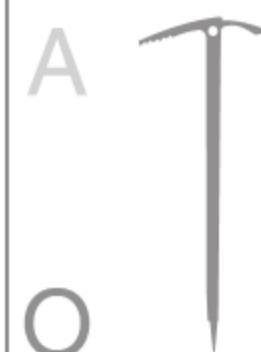
図書受入報告 (2010年4月)

著者	書名	ページ・サイズ*	出版元	刊行年	寄贈/購入別
川喜田喜美子・高山龍三(編著)	川喜田二郎の仕事と自画像	381+4 p/20cm	ミネルヴァ書房	2010	編者寄贈
塩野米松	初代 竹内洋岳に聞く	542p/20cm	アートオフィスプリズム	2010	出版社寄贈
渡辺陸	日本における山と人間の関係史年表(増補改訂版)	757p/26cm	渡辺陸(私家版)	2009	著者寄贈
平野裕也(編)	フォーラム「登山を楽しくする科学(Ⅱ)」	21p/30cm	JAC科学委員会	2010	当会発行
中部博之	山の賛歌 ——中部博之画集	66p/30cm	アートエキスプレス	2010	著者寄贈
JAC百年史編纂委員会(編)	「山岳」追悼録 上巻(「山岳」追悼コピー集)	531p/30cm	JAC百年史編纂委員会	2007	当会発行
JAC百年史編纂委員会(編)	「山岳」追悼録 中巻(「山岳」追悼コピー集)	367p/30cm	JAC百年史編纂委員会	2007	当会発行
JAC百年史編纂委員会(編)	「山岳」追悼録 下巻(「山岳」追悼コピー集)	355p/30cm	JAC百年史編纂委員会	2007	当会発行
橋本勝	谷川岳——橋本勝写真集	95p/27cm	橋本勝(私家版)	2010	著者寄贈
Stephen Goodwin(ed.)	The Alpine Journal 2009 (Vol.114, No.358)	421p/22cm	Ernest Press	2009	編者寄贈
Walter Theil(ed.)	Alpenvereinsjahrbuch BERG 2010 (Band 134)	320p/27cm	DAV, OAV, AVS	2010	DAV

INFORM

INFORMATION

INFORMATION



平成22年第26回全国支部懇談会

平成22年全国支部懇談会は東京多摩支部にお願いし、東京近郊での9月5日(日)、6日(月)の2日間の開催が決まりました。

新公益法人法に伴い、行政の方針に沿って日本山岳会の組織が変わろうとしています。当然、運営、活動においても新しい時代にあつた環境を整えていかなければならぬ、変換期を迎える昨今の背景のなかで、今年の全国支部懇談会を開催させていただきます。

今までの全国支部懇談会は毎年各支部持ち回り(年番制)で開催支部の特性、その時代を反映するテーマで開催してきました。今年は新設5支部以前の既存25支部最後の開催担当を宮城支部に依頼させていただきおりました。が、宮城支部のご都合で開催遅延のご依頼を受け、新設5支部への開催依頼となり、今年2月20日に第29番目の支部として設立した「東京多摩支部」に平成22年の全国支部懇談会の開催をお願いいたしました。

①会員が一つになつて考え、実践する組織づくりをテーマとする。②支部長会議の連携(併設)開催。③支部活性化PTとの交流。④全国支部報編集者会議などを織り込み、東京多摩支部の特性を生かした新たな時代に向き合い、今、日本山岳会が抱える課題、四つのPTの活動方針にあわせ会員、組織が一団となつた組織づくりにつながる全国支部懇談会の開催を期待しています。

(神崎忠男)

◆上高地フロートレッキング	解散 9日 戸台口	費用 1万3000円(1泊2日)	定員 15名	申込 7月5日までに、成瀬ヒサ
		(FAX) 045-933-6826		✉ h-naruse@kif.biglobe.ne.jp)

*申込者に詳細を送ります

◆山岳地図の寄贈について
図書管理委員会

この度山岳地図でお馴染みの昭文社より当会図書室に「山と高原地図」二〇一〇年最新刊(全59巻)をご寄贈頂きました。皆様の山行計画や山岳研究にぜひお役立て下さい。

◆仙丈ヶ岳、東駒ヶ岳を登る

集会委員会

日程 8月8日(日)~9日(月)	集合 8日 伊那市南アルプス林道バス	解散 時30分
	戸台口バス停 5	

◆第8回土曜懇話会(再案内)

集会委員会

場所 ジターセンター前の広場	集合・解散ともに上高地ビ
費用 無料(ただし資料代と事務費500円を徴収します)	16時予定

✉ skbtaw@yahoo.co.jp

◆自然エネルギー発電の現状と課題

集会委員会

日時 6月19日(土)15時より	講師 森武昭氏
---------------------	------------

常に分かりやすい。本講演ではこの点を解説し、エネルギー問題を参加者と共に考えてみたい。

6月19日(土)15時より
講師 森武昭氏
* 詳細は4月号インフォメーション欄を参照ください

日本山岳会会報 山 780号

2010年(平成22年)5月20日発行
発行所 社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンピューハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 尾上 昇
編集人 神長幹雄
Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp
印 刷 株式会社 双陽社

日本山岳会の現状と立地的に東京開催ということを考慮した計画を用意したいと、支部担当理事と東京多摩支部との連携のなかに開催準備に取り組みます。今の現状から会員の情報の共有、共通した会員の知識の情報源となる全国レベルの会員懇談会を想定した集会とし、会員全員でこれからの日本山岳会を考え、実践していく基本構想にそつて、準備を整えたいと思います。

今年度の全国支部懇談会開催の具体的な構想を次のように策定させていただきます。

①会員が一つになつて考え、実践する組織づくりをテーマとする。②支部長会議の連携(併設)開催。③支部活性化PTとの交流。④全国支部報編集者会議などを織り込み、東京多摩支部の特性を生かした新たな時代に向き合い、今、日本山岳会が抱える課題、四つのPTの活動方針にあわせ会員、組織が一団となつた組織づくりにつながる全国支部懇談会の開催を期待しています。

(神崎忠男)